

かけだ詩⑪

そだちと臨床研究会

かわばた
川畑
たかし
隆

語感

ダイバーシテイは
ダイバーの街
インフルエンサーは
インフルエンザに罹った人
レジェンドは
ウイスキーとクルマの名前
サブスクは
「寂しく」の方言
アカハラは
赤唐辛子のヒリヒリ攻め
エビデンスは
エビの自己紹介「エビデヤンス」
サステナビリティは
「さすってな」と頼める能力
ロックダウンは
酔っ払いが言ったつもりのノックダウン

心理テスト

心理テストってどんなん
やってみるかといわれて
ウンとうなずいたら
木を一本描いてって
描いたらめっちゃむずかしい
何がむずかしいって
人を描くのとぜんぜん違って
木なんてそんなもん
詳しく描いたことないもん
どうなってるのかようわかれへん
こんなん何がわかん
って尋ねたら
あんたとまったく同じ木
描く人がおると思っかって
似た木はあると思っけど
まったく同じ木を描く人
まあおらんやろ
そしたら他やない
あんたらしさが出てるんちやうか
っていうんやけど
そういわれりやそうかもな
たかが心理テスト
されど心理テストやって
いうてはったで

表すものと表されるもの

赤くて丸くて 手にのせたら少し重くて
口にしたら硬くてお汁が出て甘酸っぱくて…
それを表すのが「リンゴ」というコトバ
赤くて丸くて…は表されるもの

もつとも

赤くて丸くて…も

五感をおして実感される表される実体
を表すコトバ

「リンゴ」というコトバがあれば

リンゴがないところでも

リンゴのことを話すことができる

表されるものから表すものが飛び立ち

コトバはできあがる

でも

「リンゴ」によって表されるのは

赤くて丸くて…を自明の入口としているとしても

けっして同じではない

リンゴの背景にある

それぞれにとっての裾野の広がり 想い出

そこに広がった風景が

たとえ似たようなものであっても
ある人はそれを

「ミカン」というコトバをおして
表すかもしれない

表すものを聴いただけでは聴いたことにならない
表すものをおして
表されるものの奥を聴くことができれば
その人のことをよりよく聴いたことになる
のかもしれない

表すものと表されるもの…能記(形)と所記(意味)として、スイスの言
語学者ソシュールが唱えた。

臆病者

ふりむかないんじやなくて

ふりむけない

だって ふりむいたりしたら

君がまたいないかもしれない

一緒に降りた駅の改札口から

君がいなくなった
呆気に取りられて探したけれど
どこに行ってしまったんだろう

混乱のままに君が戻ってくるのを待った
あり得ないことが起きる気配は
ぼんやりとでも感じていたかもしれない
そのまま戻ってこないことが怖かった

君が姿をあらわしたのは数時間後
寄ってくる君に背を向け
一直線に突き進んで電車に乗った
したことの激しさで争った

怒っていた
怒っているのを示す以外になかった
でも後を追ってくる君を確かめたかった
ただ足音が無数であることにも救われた

駅を降りて下宿に向かった
背後の可能性はほとんどしぼんでいた
それでも部屋のドアを内側から見つめた
それからはふりむきっぱなしだった

夜に君が電話をくれた
一言答えて受話器を激しく置いた
一度の拒絶では足りなかった
臆病者はまだ臆病だった

贖罪

父は名君ではなかった
そのせいで母の命を救えなかった
母を失った息子は暴君になり
父は奴隷になった

無理難題を強いられてありがたかった
殴ってくれてよかった
父は息子の前にひれ伏し
息子は父を引きずりまわした

でも自分に尽くしているのは
母ではなく父だった
息子は母の不在を突きつけられた
父にはどうしようもなかった

でも時間は悲しみを薄めていった
父は母の代役を退いた
母がいなくても平和な国が
父と息子で再建された

ダメな父親だと嘆いていた父
あんなに忠実な奴隷を
あんなに立派な父親を
私はそれまで見たことがなかった

向き合う

* 「エンディングカット」

納棺前のヘアカットの営み

ほかに逃れる道を儀式が閉ざし

家族の濃密な時と空間があらわれる

生きてきた道と

生きていく道が開かれ

涙の中に笑いも生まれた

「向き合う」とはこういうことか

* 「私たちが家族が二十年をかけて学んだのは、『試練の中でこそ魂が磨かれ、人の幸せを願う深みのある優しさと、倒れても立ち上がろうとする真の強さが育まれる』ということです。家族の絆もさらに強くなりました。それらは決してお金で買うことができない宝物であり、彩花が命をかけて教えてくれたことに他なりません。これからも、体験し学んだことを丁寧に社会にお返ししていくことが、私たちの役目だと思っております。」

これほど「向き合う」ということが

ズシンと響いたことは

これまでになかった

ことばなんか添えられない

* NHK総合テレビで二〇二二年三月一九日に放映された、芦田愛菜・広末涼子・佐藤隆太出演の「土曜ドラマ」。母（広末）の死を主軸に「向き合う」ことがテーマになっていました。

* 神戸市で起きた連続児童殺傷事件で亡くなった山下彩花さんの母・京子さんが、五年前に亡くなる前に綴った手記の言葉だそうです。父・賢治さんが、事件から二十五年たった思いを綴った手記（朝日新聞二〇二二年三月二三日朝刊に掲載）に、「今も私の胸に深く刻まれております。」として引用されています。なお、ここに引用するにあたって記事中の括弧と数字の表記を変更しています。

呪文

そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
そうじゃないかもしれないけど
そうかもしれない

気持ちがあやふやで自信がないときなどは
そうだとか
そうじゃないとか
言い切るのがよいときもある
でも事実の記憶はその人なりで

論説はその人がそう言いたいだけかもしれない
まことしやかに思わされて梯子をはずされても
また疑い過ぎて大切なことを手に入れ損ねても
押しした人も後ろから押されたのかもしれないし
腹立たしい嘘もやさしい思いやりだったりして
ゾウは大きいけれどクジラよりは小さくて
絶対そうだといてもそうじゃないかもしれない

だから呪文のように

そうかもしれないけど
そうじゃないかもしれない
そうじゃないかもしれないけど
そうかもしれない

認識の勝利

「あなたの意見に同意はしないが、
あなたのその意見を云う権利は
命をかけて守る」
この言葉がくれた枠組みに助けられた
同意できない相手の意見を否定したい自分に
目指せる道が示された

自らは同性との恋愛を想像できないのに
性の多様性を訴える資格はないと
悩む若者に

「私は同性との恋愛感情はないが
多様な性の権利は
命をかけて守る」

と何の矛盾もなく言えるのではと提案した
根強い感情に対して認識が勝利した

破壊

あなたを幸福にしますという正義
でもその正義の蓋を開けてみれば欺瞞と搾取
破壊してはいけないという正義
それさえ守られれば他は大目にみられるかのような正義
正義が正義ではなく不幸の元だと知り尽くせば
あらゆる正義を破壊するしかないか